


# 反優位性について

## On Anti-Superiority

吉田 智行 YOSHIDA, Tomoyuki

● 国際基督教大学  
International Christian University

 **Keywords** 優位性, 反優位性, 談話連関  
superiority, anti-superiority, D-linking

### ABSTRACT

これまで優位性と反優位性という現象は、理論言語学の研究対象として様々な分析が提案されている。本稿では、反優位性に焦点を当て、談話連関の制約からこの現象に理論的な説明を与える。通常WH移動が義務的な言語においては、WH-in-situが制限された談話連関の位置にしか出てくることができない。これに対して、日本語のようにWHを義務的に移動せずWH-in-situを自由に許す言語では、WH-in-situが談話連関していなければならないという制約がない。このような言語のWH-in-situの特性から日本語の反優位性の的確な分析の手がかりを探る。様々なタイプの言語を比較することによって、反優位性は日本語に特有な現象ではなく、談話連関が義務的なポジションに対する普遍的な制約から説明できることを示す。

Superiority and Anti-Superiority have been extensively investigated in theoretical linguistics and various proposals have been presented in the linguistic literature. This paper focuses on Anti-superiority and presents a principled account for this phenomenon based on D-linking. Languages with obligatory WH-movement may allow WH-in-situ only if it is D-linked. Japanese, which is not a language with obligatory WH-movement, on the other hand, allows WH-in-situ rather freely and in-situ WHs do not require D-linking. By comparing different types of languages, this paper shows that Anti-Superiority exhibited in Japanese can be nicely explained in terms of D-linking alone.

## 1. 反優位性 vs. 優位性

本稿では日本語のWH疑問文の反優位性 (Anti-Superiority) と呼ばれる現象に焦点を当て、複数のタイプの異なる言語との比較にもとづき、この現象が談話連関 (D-Linking) の制約から説明できることを示す。まず日本語の反優位性のデータから見てみよう。

(1) a. ジョンは 何を なぜ 買ったの？

b.\*ジョンは なぜ 何を 買ったの？

表面的には同じような文に見えるが、意味解釈の点からは大きく異なる。(1a) は単純に買った物とそれを買った理由をペアにして答える解釈が可能であるが、(1b) に関しては多くの母語話者がどう解釈していいかわからず戸惑いを感じるのである。これを反優位性の現象と呼ぶ。

この現象は英語と比較すると不可思議なものであることがわかる。以下のデータが示すように、英語では *why* と *what* の順番が日本語と真反対になっていなければならない。

(2) a.\*What did John buy why?

b. Why did John buy what?

すなわち、日本語ではWHY-WHATの順番が許されず、英語ではWHAT-WHYの順番が許されないのである。<sup>i</sup> 英語の場合は優位性 (Superiority) の現象が見られるので、(2) の文法性のコントラストも以下のデータと同様に分析されたこともある。

(3) a. Who bought what?

b.\*What did who buy?

(4) a. What did John give to who(m)?

b.\*Who(m) did John give what to?

英語は多重WH疑問文においてWH表現の一つだけを文頭に移動するタイプの言語である。その他のWH表現は移動せず、もともとの位置に残るWH-in-situとなるが、(3) と (4) が示すように、文頭に移動できるWHは移動前の文において他のWHよりも構造上高い位置に在るものでなければならない。したがって、WHYがWHATよりも構造上高い位置にあると仮定すると、WHATを文頭に移動させる (2a) はこの優位性の現象を示し

ていると考えられるのである。一方、日本語は語順が比較的自由的な言語であるから、WHの語順が文法性を左右することは少なく、英語の (3) と (4) に見られるコントラストは日本語では通常観察されない。

(5) a. 誰が 何を 買ったの？

b. 何を 誰が 買ったの？

(6) a. 何を ジョンは 誰に あげたの？

b. 誰に ジョンは 何を あげたの？

以上のことから、これまでは日本語には反優位性が、英語には優位性があると考えられてきたわけであるが、英語の優位性そのものについての理論的な説明を探究する過程の中で、(2) のコントラストは優位性とは異なる現象であると理解されるようになった。<sup>ii</sup> 本稿で (1) と (2) のデータを他の言語と比較することによってWHYの特性を統語論と意味論の観点から議論する。

## 2. WHYと談話連関

これまで多くの言語で「なぜ」を意味する単語が談話連関しにくいという事実が報告されている。フランス語では以下の (7a) のようにWHを文頭に動かしても、(7b) のようにももとの位置に置いたままでも疑問文を作ることができる。

(7) a. Qui as-tu vu?

whom have-you seen

'Who did you see?'

b. Tu as vu qui?

you have seen whom

Obenauer (1994) によれば、(7a) は単純に聞き手が誰に会ったのかを尋ねている疑問文であるのに対して、(7b) は話し手と聞き手が談話において知識を共有している人のうちの誰に会ったのかを尋ねる疑問文であるという。すなわち、WH-in-situは談話連関されたWHのみに許されるのである。談話連関されている (D-linked) WHがWH移動をおこさずWH-in-situになるという現象は数多くの言語で観察されており、次節で様々な言語のデータを見ることにするが、ここで興味深いのは以下のコントラストである。フランス語の

*pourquoi* (なぜ) は必ず文頭に移動しなければならない。

(8) a. Pourquoi es-tu venu?

why have-you come

'Why did you come?'

b.\*Tu es venu pourquoi?

you have come why

Obenauer は、談話連関されていない WH は文頭に移動させなければならないが、談話連関されている WH はももとの位置に置いて構わないという分析を提案しているが、この分析が正しければ、*pourquoi* は談話連関することが難しい要素であるということになる。さらに、Bayer (2006) によれば、ドイツ語でも似たような現象が見られるという。

(9) a. Der Hans hat wen gesehen?

the Hans has whom seen

'Who did Hans see?'

b.?? Du bist warum nach Patmos gefahren?

you are why to Patmos gone

'Why did you go to Patmos?'

このように、ドイツ語の *warum* (なぜ) も WH-in-situ にすることができない。Bayer は、WHY とはほかの WH の違いは個別化のしやすさにあり、答えを想定する際に個別化しにくい WHY は談話連関も難しいと分析している。すなわち、WHO, WHAT, WHEN, WHERE などの場合、人、物、時、場所などは、ひとつひとつを個別化してとらえることができるが、WHY の場合は普遍的にこの個別化が難しいというのである。これに対して、明確に談話連関している WHICH REASON のような形式は WHY に比べて個別化がしやすく、以下のように、ドイツ語でもももとの位置に置くことが可能になるという。

(10) Du bist aus welchem Grund

you are for which reason

nach Patmos gefahren?

to Patmos gone

'For which reason did you go to Patmos?'

日本語でも「なぜ」よりも「どの理由で」の方が個別化しやすいという事実は、Miyagawa (2004)

がすでに指摘している。Miyagawa は、Rizzi (1990) や Bromberger (1992) にしたがって、「なぜ」を文副詞であると仮定し、「なぜ」が談話連関できないのは「なぜ」が本来的に前提をもたないからであると説明する。たしかに、日本語でも「なぜ」というよりも、「どの理由で」と言った方が、理由をひとつひとつ個別にとらえやすくなる。また、「どの理由で」の場合は、話し手と聞き手が共有する可能な理由の中のどれかを問うているので、談話連関していることが明確である。以下のデータのコントラストはこのポイントを明確に反映している。

(11) a.\*たとえば なぜ パリに 行ったの?

b. たとえば どの理由で パリに 行ったの?

「たとえば」という表現は個別化して例示できないものに関しては使えないものであるから「なぜ」と共起することができないのである。

以上の観察から、WHY は普遍的に個別化しにくく、談話連関することが難しい要素であり、WH 移動が義務的な言語では WHY を WH-in-situ にすることができないと結論付けることができる。これは本来義務的にかからなければならない WH 移動を回避するには、談話連関による許可が必要であることを示している。つまり、動くべき WH が動かないことで、その WH が談話連関している WH であるという特別な意味が示されるのである。英語はフランス語やドイツ語とは違い WH を一つしか含まない WH 疑問文では WH-in-situ を許さない。したがって、以下の (12b) の文は買った物が何かを問う疑問文としては理解できない。<sup>iii</sup>

(12) a. What did you buy?

b.\*You bought what?

しかしながら、WH-in-situ が談話連関を必要とするという制約が英語にも当てはまるとすると、上述の (2a-b) = 以下の (13a-b) のコントラストはこの制約から生じたものであると考えられるのである。

(13) a.\*What did John buy why?

b. Why did John buy what?

英語の場合も、why は談話連関しにくく WH-in-situ にすることができないので、why が文頭に移動

しなければならないのである。この点において、日本語は英語と大きく異なる。日本語ではWH移動をせず「なぜ」を含む全てのWHをWH-in-situにすることができる。すなわち、WH-in-situに何か特別な意味や機能が付加されてはいない。もし日本語のWH-in-situにも談話連関されていなければならないという制約があるとしたら、WH要素の移動を含まない最も一般的なWH疑問文は全て談話連関した疑問文でなければならなくなる。これは明らかに事実と異なる。「なぜ」が個別化しにくく談話連関が難しいという点は他の言語と同様であるが、WH-in-situの談話連関の制約は義務的にWH移動をする言語にのみ当てはまるものであると考えるべきである。したがって、上述の(1a-b) = 以下の(14a-b)のコントラストはWH-in-situの談話連関の制約とは異なる制約から導き出さなければならない。

(14) a. ジョンは 何を なぜ 買ったの？

b.\*ジョンは なぜ 何を 買ったの？

この問題を解くために、次節では義務的に全てのWHを移動させるタイプの言語のデータを検証することにする。

### 3. 多重WH移動の言語と談話連関

以下の(15a)に示されるように、ポーランド語は全てのWHを義務的に文頭に移動させるいわゆる多重WH移動(multiple WH-fronting)の言語であるが、Wachowics (1974)は、(15b)のように目的語のWHを動かさないで元の位置に置いたままにした例文が完全に非文法的であるとはかぎらないと指摘している。

(15) a.Kto co robi?

who what does

‘Who does what?’

b.W końcu, kto robi co?

finally who does what

誤解のないようにWachowicsの説明を引用する。

The speaker could ask [(15b)] in the following situation. There are various tasks, and several people to be assigned for them. Proposals have been made how

to pair up people and tasks, but no fixed plan has been set up yet. The speaker of [(15b)] is confused by the proposals, and wants to have a fixed plan. (Wachowicz 1974: 159)

Wachowiczによれば、(15b)が使える状況は、目的語のWH-in-situが談話連関されていて、すべき事と人のペアが完全に決まっていらないような状況であるということである。<sup>iv</sup>したがって、前節で見た談話連関の制約が多重WH移動の言語にも当てはまるということになる。

それでは、ポーランド語の*diaczego* (なぜ)を含む多重WH疑問文はどのような動きを見せるのであろうか。(16a)と(16b)のコントラストが示すように、ポーランド語でも*diaczego*はWH-in-situにすることができないが、(16c)のように*zjakiego powodu* (どの理由で)はWH-in-situにすることができる。したがって、以下のデータは、英語、フランス語、ドイツ語と全く同じ、WH-in-situに対する談話連関の制約から説明できる。

(16) a.\*Kogo Maria zabiła dlaczego?

whom Maria killed why

‘Whom did Maria kill why?’

b.Diaczego Maria zabiła kogo?

why Maria killed whom

‘Why did Maria kill whom?’

c.Kogo Maria zabiła zjakiego powodu?

whom Maria killed for-what reason

‘Whom did Maria kill for what reason?’

多重WH移動を起こしたときには、*diaczego*は最も左のWH (leftmost WH) の位置に置くことができないが、*zjakiego powodu*はそれが可能である。

(17) a. Kogo dlaczego zabiła Maria?

whom why killed Maria

‘Why did Maria kill whom?’

b.\*Diaczego kogo zabiła Maria?

why whom killed Maria

c. Zjakiego powodu kogo Maria zabiła?

for-what reason whom Maria killed

‘For what reason did Maria kill whom?’

同様のパターンがロシア語でもRojina (2006)によって観察されている。

- (18) a. Kuda začem on hodil?  
 where why he went  
 ‘Why did he go where?’

b. \*Začem kuda on hodil?  
 why where he went

また, Dina Tokmakova (p.c.) によると, 以下の例文が示すように, *kakoy pričine* (どの理由で) の場合には *začem* (なぜ) のような制約が見られない。

- (19) a. Kuda po kakoy pričine on hodil?  
 where for what reason he went  
 ‘Where did he go for which reason?’

b. Po Kakoy pričine kuda on hodil?  
 for what reason where he went  
 ‘For which reason did he go where?’

このように, ロシア語のデータはポーランド語と全く同じパターンを示しているが, どちらの言語も日本語と同様に優位性の現象を示さないことが知られている。Stepanov (1998) のロシア語のデータを見てみよう。

- (20) a. Kto kogo videl?  
 who whom saw  
 ‘Who saw whom?’

b. Kogo kto videl?  
 whom who saw

- (21) a. Kogo komu predstavil Ivan?  
 who whom introduced Ivan  
 ‘Who did Ivan introduce to whom?’

b. Komu kogo predstavil Ivan?  
 whom who introduced Ivan

これらのデータからわかるように, 多重WH移動の起こっているWH疑問文において複数のWHの順番が問題になるのはWHYが他のWHに対して最も左に置かれたときのみである。またWHY以外のWHに関しては, 日本語と同様に特定の順番で出て来なければいけないという制約はない。<sup>v</sup>

さらに驚くべきことに, 日本語よりも語順が自由だと考えられる, バスク語 (Reglero 2003) でも多重WH移動を含む疑問文では全く同じパターンが観察されている。

- (22) バスク語

a. \*Nork lapurtu ditu bitxiak zergatik?

who steal AUX jewels why  
 ‘Who stole the jewels why?’

b. ?Zergatik lapurtu ditu bitxiak nark?  
 why steal AUX jewels who  
 ‘Why did who steal the jewels?’

c. Nork zergatik lapurtu ditu bitxiak?  
 who why steal AUX jewels

d. \*Zergatik nork lapurtu ditu bitxiak?  
 why who steal AUX jewels

ちなみに, バスク語は優位性を示すことが知られている。したがって, 優位性を示すかどうかはWHYが最も左のWHのポジションに出て来ることができるかどうかということと直接的な関係がないことがわかる。

次節では, これまで見てきた多重WH移動の言語においてWHYが最も左のWHのポジションに出てくることができないという現象と, 日本語の「なぜ」が最も左のWHになれないという現象は同じ制約から導き出すことができるとことを示すことにする。

#### 4. 多重WH疑問文の意味解釈

多重WH疑問文の意味解釈は可能な答えを手がかりに研究されてきた。たとえば, 以下の (23a) の質問の答えとして (28b-d) が可能である。

- (23) a. Who invited who?

b. John invited Mary.

c. John invited Mary, Bill invited Jane and Tom invited Sue.

d. Everyone invited his girlfriend.

一般的に, (23b) は「シングル・ペアの答え (single-pair answer)」, (23c) は「ペア・リストの答え (pair-list answer)」, (23d) は「関数的答え (functional answer)」と呼ばれている。本節では「ペア・リストの答え」について考えることにする。英語の多重WH疑問文では, 最も左に置かれたWH (leftmost WH) が網羅的 (exhaustive) にほかのWHと組み合わせられなければならないという意味的制約があることが, Comorovski (1989, 1996) や Dayal (1996) によって指摘されている。ここで

はDayalの議論を考えてみよう。Dayalは、男性対女性のテニスの試合をする状況を設定し、男性が3人、女性が4人いる(24)の状況と、男性が4人、女性が3人いる(25)の状況の2つを比較する。

(24) a. 男性: John, Bill, Mike

b. 女性: Mary, Sue, Jane, Sarah

(25) a. 男性: John, Bill, Mike, Harry

b. 女性: Mary, Sue, Jane

Dayalによれば、以下の(26)の英語の質問は、男性が女性より1人少ない(24)の状況では特に問題がないが、男性が女性より1人多い(25)の状況では不自然であるという。

(26) Which man is playing against which woman?

すなわち、試合相手の女性がいらない男性がいるような状況では(26)の質問ができないということである。この事実から、Dayalは、主語のWHは網羅的に答えられなければならないが、目的語のWHは網羅的に答えられなくても良いと結論づけている。Dayalはさらに日本語のようなスクランブリング(scrambling)を許す言語にもとづいて、主語や目的語などの文法関係が問題なのではなく、最も左に出て来るWH(leftmost WH)が網羅的にリストされなければならないと主張する。(27a)と(27b)を比較して考えてみよう。

(27) a. どの男性が どの女性と 試合をするの?

b. どの女性と どの男性が 試合をするの?

(27a)は、(24)の状況では全ての男性に試合相手が存在するので問題ないが、(25)の試合相手の女性がいらない男性が存在する状況ではこの質問は不自然に聞こえる。それに対して、(27b)は(24)の状況では不自然な質問であり(25)の状況では問題ないという適切な状況は逆になる。この事実は最も左に置かれたWHが網羅的に答えられなければならないということを示している。このように、(27a)の場合は男性が、(27b)の場合は女性が網羅されたペア・リストの答えが期待されているのである。<sup>vi</sup>

また、Comorovski(1989, 1996)は、多重WH疑問文の最も左に置かれたWHには、次の2つの特性があると論じた。

(28) a. 全称量化力(universal quantification)を持つ。

b. 談話連関されている。

Comorovskiによれば、最も左に置かれたWHが持つ全称量化力から網羅的解釈が要求され、そのWHが談話連関されていることによって、網羅的な答えが可能になるという。つまり、多重WH疑問文に網羅的に答えるためには、最も左に置かれたWHに、ほかのWHをペアにした網羅的なリスト・アンサーを出さなければならないが、網羅的な答えを出すには、最も左に置かれたWHが示し得る個体の集合が、話し手と聞き手に共通に理解されていなければならないというのである。

## 5. 結論

WHYを含むWH疑問文の文法性は談話連関一つで説明することができる。結論としては、WHYは談話連関されていなければならないWHを要求するポジションには出てくることができないということ、本稿で扱った全てのデータに統一的な説明を与えることができる。日本語以外の言語ではWH-in-situは談話連関されていなければならないという制約からWHYをWH-in-situにすることができない。日本語はWH-in-situに義務的な談話連関を要求しないので一見WHの語順が自由に見えるのである。しかし、多重WH疑問文においては、最も左のWHが網羅的に解釈されなければならない場合は、日本語を含むどの言語もその位置にWHYを置くことができない。日本語の反優位性の現象はこれだけで説明がつくのである。「なぜ」と「どの理由で」の違いも、後者が談話連関されているWH表現であり、それゆえ最も左のWHの位置に置かれても問題ないと説明できるのである。

最後に、英語、ポーランド語などのWHYのみが文頭に移動するデータをもう一度考えよう。

(29) a. Why did you buy what?

b. Dlaczego Maria zabiła kogo?

why Maria killed whom

‘Why did Maria kill whom?’

この場合、WH-in-situのWHATが談話連関されていることがわかる。WHYは文頭に置かれているので、表面的には最も左のWHの位置になることになる。なぜこれらの疑問文は非文にならないのであろうか。この疑問に対する答えも談話連関から導き出すことができる。すなわち、談話連関されているWHATを網羅的に答えるようなペア・リストの答えが可能であれば、WHYは表面的に最も左のWHの位置にいても問題がないと考えられる。たとえば、(29a)には(30)のような答えが可能である。

(30) I bought a car because I needed it, I bought a book for no reason, I bought two apples because I was hungry.

このように買った理由が特になくても問題ないとするれば、買った物を網羅的に答えるリストを作ればいいということである。したがって、(29a)のWHYは談話連関されてる必要がない。ポーランド語の(29b)も同様であるが、全てのWHが移動している多重WH疑問文では、最も左に置かれたWHは網羅的なリストを作るために必ず談話連関していなければならないのでWHYは許されないものである。

## 参考文献

- Aoun, J., Hornstein, N. & Sportiche, D. (1981). Some aspects of wide scope quantification. *Journal of Linguistic Research* 1, 69-95.
- Bayer, J. (2006). Wh-in-situ. In Everaert, M. & van Riemsdijk, H. (Eds.). *The Blackwell companion to syntax*. (pp. 377-438). Oxford: Blackwell.
- Bošković, Ž. (2002). On multiple *wh*-fronting. *Linguistic Inquiry* 33, 351-353.
- Comorovski, I. (1996). *Interrogative phrases and the syntax-semantics interface*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Dayal, V. (1996). *Locality in WH quantification*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Hornstein, N. (1995). *Logical form: From GB to minimalism*. Oxford: Blackwell.
- Huang, C.-T. J. (1982). *Logical relations in Chinese and the theory of grammar*. Unpublished doctoral dissertation, MIT.
- Lasnik, H. & Saito, M. (1984). On the nature of proper-government. *Linguistic Inquiry* 15, 235-289.
- Lasnik, H. & Saito, M. (1992). *Move  $\alpha$ : Conditions on its application and output*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Miyagawa, S. (2004). The nature of weak islands. Unpublished manuscript, MIT.
- Miyagawa, S. (2005). EPP and semantically vacuous scrambling. In Sabel, J & Saito, M. (Eds.). *The free word order phenomenon: its syntactic sources and diversity* (pp. 181-220). Berlin: Mouton de Gruyter.
- Miyagawa, S. (2006). On the undoing property of scrambling: A reply to Bošković. *Linguistic Inquiry* 37: 607-624.
- Obenauer, H. G. (1994). *Aspects de la syntaxe A'*. Unpublished doctoral dissertation, University of Paris 8.
- Pesetsky, D. (1987). *Wh-in-situ: Movement and unselective binding*. In Reuland, E. & Meulen, A. G. (Eds.). *The representation of (in)definiteness* (pp. 98-129). Cambridge, MA: MIT Press.
- Pesetsky, D. (2000). *Phrasal movement and its kin*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Reglero, L. (2003). Non-*wh*-fronting in Basque. In Boeckx, C & Grohmann, K. K. (Eds.). *Multiple Wh-fronting* (pp. 187-227). Amsterdam: John Benjamin.
- Rojina, N. (2006). Russian multiple *wh*-questions revisited. Handout for the first meeting of the Slavic Linguistics Society, Indiana University, Bloomington.
- Saito, M. (1994). Additional-*wh* effects and the adjunction site theory. *Journal of East Asian Linguistics* 3, 195-240.
- Stepanov, A. (1998). On *wh*-fronting in Russian. *NELS* 28, 453-467.
- Wachowicz, K. (1974). Against the universality of a single *wh*-question movement. *Foundations of Language* 11, 155-166.
- Watanabe, A. (1991). *Wh-in-situ, subadjacency, and chain formation*. MIT occasional papers in linguistics 2, Department of Linguistics and Philosophy, MIT.
- Watanabe, A. (1992). Subadjacency and S-structure movement of *wh-in-situ*. *Journal of East Asian Linguistics* 1, 255-291.

## 注

- i 以下、他の言語との比較の便宜上、疑問詞表現を言語にかかわらず英単語の大文字で示すことにする。
- ii これまでの分析は大きく二つに分けられる。一つは空範疇原理にもとづくもので、もう一つはWHYが他のWH演算子と異なるレベルのものであると考えるものである。Aoun, Hornstein and Sportiche (1981), Huang (1982), Lasnik and Saito (1984,1992), Watanabe (1991, 1992), Saito (1994), Hornstein (1995), Miyagawa (2004)などを参照のこと。
- iii もちろん、文末上がりの特別なイントネーションで発

話して「もう一度言ってください」の意味合いをもつ  
エコー疑問文としては使用されるが、WH疑問文とし  
ての解釈とは異なる。

- iv Pesetsky (1987, 2000) と Bošković (2002) によれば、談話連関されているWHがWH移動せずにもとの位置にWH-in-situとして残るという現象は、ブルガリア語、チェコ語、ルーマニア語、ロシア語、セルボクロアチア語でも見られるという。
- v HOWについては言語間でばらつきがある。HOWもWHYと同じように最も左のWHの位置に置くことができない言語もあれば、一定の範囲内での他のWHとの組み合わせによってできる言語もある。
- vi Miyagawa (2005, 2006) でも同様の観察がある。